

## 忘れな草

馬場駿

四十五歳の誕生日が過ぎて間もないころ、久しぶりに横浜にある姉の家を訪れた。

短い言葉をやり取りしながら居間に入ったとき、私は幅の狭い壁に窮屈そうにしている額縁を見つけた。パステル画の忘れな草、それはかつての恋人が私の誕生日にと何日もかけて書いてくれたものだった。

「べつに君のために描いたって訳じゃないんだ、誤解するなよ」と、あなたはそれでも、贈り物を包むにふさわしいデザインの包装紙を丁寧に剥がしながらはにかんだ。

「えーえ、そうでしょうとも、出来たけどどこか気に入らなかつたから私に回してきたんでしょ」と胸を躍らせながらも憎まれ口をきいた私。

出てきた忘れな草の群れは鮮やかな色彩の中に深い哀しみの色を宿していた。あなたはきつと、今のいまの私たちを予想していたのね。もう二十年も前のできごと……私はこんなにおばさんになつてしまったのに、少しも変わらないパステルの色。ずるい。「きよう来るの？ 彼。同窓会なんでしょ」

姉の声で我に還った。

「たぶん。でも、会いたくないなあ」

「どうして？ そのために来たんでしょ、そのためのおめかし、そのための美容院。けっこういけてるわよ、肌の艶もいいし」

「でも、この絵の色にはもどれない」

もし、くすんだのが私だけだったらどうしよう、惨めすぎる。そう思った。

「いじわるね、姉さん。思い出したように壁に掛けたりして」

「何勝手言ってるの」と姉はふくれた。

一番好きな絵なのに、毎日触れていたいい思い出なのに、夫や子どもと暮らす我が家には飾れない。見るたびに思い出の中の彼にキスするのはさすがに良心が

痛むからだ。

「だから預かっておいて」と頼んだのは私だった。

「ときどき出して飾ってやらないと、絵だって誰にも会わずにいたら色褪せちゃうわ」

姉の言うとおりだが、色褪せないために会う人は誰でもいいっていうわけじゃない。

不思議だと思う。別れてから一年、二年と歳月を重ねていくにつれて、心の中で大きくなる比重。いまの夫にとりたてて不満はないのに、息子も穏やかな性格で健康にも恵まれ、今春成人式を迎えた。マイホームもある。専業主婦だが、別に外に出て働くことを禁じられてのことではない。とにかく日々平穏で自由なのだ。

「妙子、あなたの不幸せは幸せとの距離がなさすぎる  
ことよ」

「何それ、難しい言い方しないで」

「どん底の不幸なら、たとえ退屈な幸せでも懂れが強くなるもの。そういう意味」

私が贅沢だと姉は言っているらしい。

そうかもしれないと首をすくめた。

「ごめん、おしゃべりばかりして。珈琲淹れるね」と、お気に入りのひまわりのエプロンをつける姉。片笑いで笑っている。

「姉さんはいいわよ、そうやって妹の心を揺さぶってエッセイのネタ探しをしていればいいんだから。齢五十にして悠々自適じゃない、羨ましい」

昔ながらの卓袱台の前に座ると私は、中学生の頃のように頬杖をついた。

「妙子、座る場所違うでしょ」

「あ、そうか」と私は、忘れな草が見える位置に移動した。

「姉さん、疲れないの、そうやっていつも気を遣って」

「ううん、おもしろいから平気」

「何だそりゃ」と私は下顎を突き出した。

「あなたのその癖、好きよわたし」

姉ご自慢のブルーマウンテンが卓上に載った。

「これ？」と再び下あごを突き出す私。

「まさか、頬杖の方」

馥郁(ふくいく)たる香りは姉の方にもある。時々自分の姉であることも忘れて懂れてしまう。

「時々寂しくなるでしょう」

二か月で終わった姉の結婚生活。それから二十年もの間、ずっと独りだ。

「妙子みたいに素敵な想い出があったらねえ」

「あーこれだ」

「一人暮らしそのものには孤独感はないのよ、案外。

濃密な人間関係があつて初めて、強烈な孤独感がうまれるの。だから私にはありません、悔しいけれど」

「年取っても平気？ それで」

ちよつとだけいじめたくなつた。

「うーん、多分だめかな」

「じゃあ、いまのうちに」

「女があがつちやわないうちに？」と姉は微笑した。

綺麗だと思つた。心に余裕が無ければ生まれえない表情だ。

「たまつた欲望を投げつける相手ぐらいはいるわよ」

「あ、やつぱり」

「でもそれは愛とは違つてしょ」

妙子あなたなら解るはずと、姉の視線が言っている。

私はその姉の視線をも誘つて壁の忘れな草を見た。

「ねえ、会つたら最初に何て言うの、彼に」

姉が絵から私に視線を移して目を輝かせた。

「お久しぶり、かな？」

「違つたわよ、きつと。今の妙子なら」

「何、何、教えて」

「まだ見られるかしら、わたし」

「ひどいなあ、信じられない」

真つ先に私が笑い、姉がそれを追うようにして笑いだした。

「いよいよ明日ね」

笑いが止まつたと同時に姉がため息まじりに言つた。

「うん」と中学生の頃に戻つてうなづく私。

「抱かれちゃだめよ、いいこと」

姉が珈琲カップで顔の半分を隠した。目が「本当にだいじょうぶ？」と半ば疑っている。

鋭い人だと思つた。

そこまで彼を惑わす魅力が、今の私には無い。ただ、

「もしかしたら」は大事にしたい。実際に行動に移す

かどうかは別にして。

「会いたくないなあ」

そう思い、そう口にするのは、ほんとうは誘いを期待しているからかもしれない。

「それもいいかもね」

私の心の中と、口にした言葉と、姉がどちらへの応えともとれる台詞をはいた。

カップの中の珈琲も、丸い輪を拓けるようにして波立っている。

あした、ほんとうに彼に会える。そう、あした…。少し怖くなった。

(二〇〇七年掌編小説、『石漿』に掲載)